

5月16日 神戸大学生との初交流会

神戸大学学生さんと初交流会を開きました

～支えてくれた仲間がいたから、一連の気持ちの整理がついた～



神戸大学・人文学研究科教授の松田毅先生をはじめ学生の皆さんとは、これまでマスクプロジェクトや街頭募金活動を通じて交流はありましたが、このたび5月16日に神戸大学文学部で初めての交流会を開きました。大学ということで会員一同緊張して出かけました。

13名の学生は、前回の授業で4つのグループ毎に質問事項をリストアップされていました。どれも真意を突いた鋭い質問で真剣に学ぼうとしている気持ちが伝わり、答える私たちも、日頃心の奥底に押し込めている本心を伝えたい、理解してほしいとの一心で話をしました。

「活動が続ける中でのニーズは何なのか、嫌な出来事を思い出すことにはならないのか」などの学生からの質問に、「家族が発症した2001年当時、中皮腫は兵庫県でも症例が少なく、病名が分からずに早期治療ができずにいる人が数多くいらした」「アスベスト使用が禁止になったが遅すぎる」「家族は危険性を知らなかったし、治療は対症療法しかできなかった」「連帯感がとても嬉しい」「同じ立場の方との話し合いは、勉強にもなるし元気を貰える」「一人でも苦しんでいる方を助けたいし、肺がんの方がいると『アスベストとは関係ないですか』と尋ねたい」「この病気はクボタショック以前だったら周りには理解してもらえなかった。今は活動に参加することで気持ちが穏やかになれる」など体験談を交えながらお答えしました。

また、「今後の日本での被害拡大について」との質問には、東日本大震災での瓦礫処理や復興時でのアスベストばく露の危険性について、マスクの必要性の話をしました。

「患者と家族の会を知り得たきっかけや活動参加の理由は？」との問いに「支えてくれた仲間がいたから一連の気持ちの整理がついた」「今度は発信するお手伝いをライフワークとして続けていきたい」「父親が、闘病中に『なぜ、私が中皮腫になったのか。悔しい』と話した言葉が活動の原動力になっている」「アスベストという便利なものの裏には被害者がい

ることを忘れないでほしい」など、どなたも笑顔の底にはノンアスベスト社会に向けた思いが込められていました。白熱した授業に時間が短く感じられ、純真な心で取り組まれている学生の姿にパワーとエネルギーを頂きました。今日は、次の世代にバトンを渡す第一歩になったように思います。

4月29日 5月1日 東日本大震災の被災地にアスベスト用マスクを届けよう

東日本大震災の被災地にアスベスト用マスクを届けよう



甚大な被害をもたらした東日本大震災の被災地では、これから瓦礫の撤去や倒壊した建物の解体が急ピッチで行われようとしています。倒壊した家屋の建材にアスベストが使用されています。作業員や全国からかけつけているボランティア、行政関係者や被災地の方々が、数十年後の潜伏期間を経た後にアスベストばく露被害者にならないように、アスベスト用マスクを届けるための街頭募金活動をひょうご安全センターの皆さんと一緒に4月29日(金・祝)、三宮マルイ付近と5月1日(日)長田区の若松公園「被災地メーデー会場」にて行いました。

幼い兄弟が、お父さんからそれぞれお金を受け取り、恥ずかしそうに背伸びしながら手を高く伸ばして募金箱にそっとお金を入れる、その姿をお父さんが少し離れた所で微笑ましく見つめていました。心のもった募金の意味を子供に教えていたのでしょうか。また、4人の10代の若者がそれぞれ6つの募金箱のすべてに募金してくれたり、年配の方がそっと駆け寄って1,000円札を黙って募金してくださいました。通行人の方々はチラシを受け取り、「アスベスト!!」と言いながら関心を持たれていました。

5月1日の若松公園での募金活動では、尼崎支部の方も駆けつけてくださり、会場に展示したアスベストセンターの永倉さんが被災地で撮影されたパネル写真を熱心に見つめていました。親子でパネルをご覧になっていた方は、「16年前の震災ではここ長田で被災し、この3日から夫がボランティアで石巻市に出かけるので、必ずマスクを持たせます。マスクの活動を続けてくださいね」と話され、募金にご協力いただきました。



本当に幅広い年齢の方がご協力下さりました。これからも長期に渡って活動を続けていく必要があります。皆様のご協力をお願いします。

ご寄付先 郵便振替口座 00130-3-290584
 加入者名 地震・石綿・マスク支援プロジェクト

☆アスベストセンターへ直接振替となっています。

街頭でマスク着用訴える

主人が中皮腫で亡くなり、私は「中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会」の会員です。このたびの東日本大震災でも解体工事が始まっていますね。阪神・淡路大震災のとき、解体作業中にアスベストを吸い込んだいうんで問題になりました。それを教訓に、マスクプロジェクトを立ち上げ、29日に三宮で、解体時にはマスクをするようアピール。同時に募金を集め、東日本の被災地にマスクを送ります。

(神戸・灘・主婦)

神戸新聞 4月27日夕刊
 イイみみ

神戸大学院生から感想をお寄せいただきました

平成 23 年 4 月 30 日神戸新聞朝刊
 放射能はアスベストと同様に目に見えるものではなく、特に意識もせず暮らして生きていくことができます。また、これらは即座に身体に影響を与える、といった類のものではなく、ゆっくりとしかし気づいた時には、致命的なかたちで我々の健康を蝕むものです。これらの視覚的に捉えることのできない物質を見る



ためには、我々が危機意識をもって知的に捉えるように心がける以外に方法はありません。被害に遭ってからでは遅すぎるので、予防という意味で啓蒙活動は非常に重要であり、またいかに被害を最小限に抑えるかという意味で、この度のマスク支援募金活動は意義深いものです。老若男女を問わず、ビラを受け取り、募金をしてくださった方々がおられることに、私自身まで勇気づけられました。こういった活動を通して、着実にアスベストについての理解が根付いていくことを願います。

また、被災地の方々は、原発の問題だけでなく津波や地震による被害で、ただでさえ様々な不安を抱えながら過酷な日々を過ごしておられるので、少しでも何らかのかたちで支援をしたいと考えていた私にとっても、この度の活動に参加させて頂いたことは有難いことでした。何かしたくても、何をすればいいのか、また何ができるのか、ということに悩まされておりましたので、この活動にほんのささやかながらでもかかわれたことに感謝致します。また、何かありましたら、よろしく願い致します。ありがとうございます。

3月6日 3月期 支部集会

2011年3月期 ひょうご支部集会

～ひょうご防災特別推進員 清水さんをお招きして～

1月に行われた“1.17を忘れない！”「2011地震・石綿・マスク支援プロジェクト in 神戸」に引き続き、3月の支部集会でももう少し地震と石綿について考えようと、防災対策に関する講義など震災の教訓の継承活動をされておられるひょうご防災特別推進員の清水さんをお招きして3月6日に支部集会を行いました。

震災の時は東灘署にお勤めだった元警察官の清水さんは、垂水のご自宅に帰宅出来ずに1ヶ月もの間、警察署内の道場で寝泊まりされながら「自分の命は自分で守る。人の命も私が守る」と最前線で住民や被災者の救護や救援活動をされておられました。しかし、東灘区でも1338名の方がお亡くなりになられたそうです。報道されていなくても多くの警察官・消防署員・自衛隊・ボランティア…の方たちが被災者に親身に接しておられたのでしよう。当時の記憶が少しずつ薄らいでいましたが、つらかった思い出が蘇りました。

清水さんの「毎日が防災の日」という言葉にはっとし、時間が過ぎるとつらい経験も忘れていく事に恐ろしくなりました。アスベスト疾患が忘れた頃に発症するのは、私たちに警鐘を鳴らしているのかなと思います。「近隣の人々が助け合う『共助』ができるように、独り暮らしや高齢者の方の住所の把握ができるようなマップが必要であり、365日防災の日。『もし』でなくいつも関心をもってもらいたい」と話されました。

これは、建物にアスベストが使用されているのか把握出来るアスベストマップの必要性、

いつもアスベストに関心をもってもらいたいと、日頃私たちが話をしていることと繋がるものがあります。今後は、小学校などで子供たちに防災の講演をする時には、震災時のアスベスト危険性とマスク装着の話もしていただけるとのことです。

1月17日 地震・石綿・マスク支援プロジェクト参加

地震・石綿・マスク支援プロジェクト

1月17日、震災からちょうど16年を迎えた朝、三宮マルイ前にて昨年同様に、災害時に飛散するアスベスト粉じんから身を守るための石綿防じんマスクの重要性と、国や地方自治体、学校、地域、家庭でのマスク備蓄を呼びかける活動を行いました。関西支部の皆様、神戸大学院生も駆けつけてくださいました。

寒い中でしたが、チラシやマスクを往来の方々にお配りしました。マスク配布時には正しいマスクの付け方の講習を行いました。特に若い世代の関心が高く、女子高校生の方々も熱心に耳を傾けてくれました。また、何人もの方から「このマスクはどこで購入できますか」「職場で備蓄したいのだけど」、若いお母様からは「子供の健康が心配。子供用のマスクはありますか」と尋ねられたりしました。マスクへの関心は高いように感じられました。手軽に格安で粉じんマスクが購入できるようにこれからも取り組むことが求められています。